

# 東日本大震災 復興へ向かって

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝

夢は、障害者が働く製造工場

カナリシーフーズ 福島県

震災から2年。被災地の障害者雇用は  
当時の1/2、いれからの1/3——障害者、企業、支援者たちが語った

2011（平成23）年3月11日の東日本大震災からまもなく2年。被災地の障害者雇用については、「この人を訪ねて」（2011年7月号）をはじめ、「職場ルポ」「グラビア」、「編集委員が行く」で紹介してきたが、今回改めて現地を訪ねた。三陸沿岸を車で走ると、津波が到達した地域がまだ更地のままだったり、ガレキが広がる光景に心が痛んだ。東京などでは原発事故関連のニュースが減って

きているが、福島県内に入るとテレビから原発関連ニュースがいくつも流れ、原発事故災害が日常となっていることを感じた。被災した大変な状況のなかで、障害者を新たに雇用した企業、雇用を継続する事業所、就労支援に努力してきた障害者就業・生活支援センター、力強い支援を続けている障害者職業センターの様子を報告する。

## かまぼこ工場は全壊。震災後に障害者を雇用

福島県いわき市小名浜。創業90年、ウロコジユウ（三角形をウロコと読み、そのなかに十字のマーク）が屋号の有限会社カナリシーフーズは、いわき市で最初にかまぼこ製造を始めた会社だ。その工場は3mの津波で壊れ、従業員が1人亡くなった。

4代目社長の金成勝弘かなりさんは、家を継ぐために商社で6年間の修業後、10年前に戻ってきた。かまぼこ製造だけでは

将来的に厳しいと考えた金成さんは、地の浜で獲れる魚を干物にしたり、惣菜にして販売していた。8店まで拡大した店舗は、原発事故の影響で漁ができなくなったため、閉めざるを得なかった。

「干物工場は被害を逃れましたので、



有限会社カナリシーフーズ  
金成勝弘社長

冷凍庫にあったものを販売しました。同業他社もダメージを受け、交通網が遮断されていたため、弊社に注文が殺到しました。そして、『長期保存ができる真空パックの商品を』といわれて作り始めたのですが、真空パックが間に合わない。人を雇わなければならなくなりました」

そのとき、障害者施設の担当者の人が自分たちの作る製品のカタログを持って営業にきていたことを思い出した。

「私の生まれ育った場所の近くに障害児の施設があり、おみこしを担いで訪問したこともありました。同級生にも障害のある子がいました。以前うちで働いていた青年がウツになり、仕事ができないと退社し連絡がつかなくなったという心残りもありました。自分が人を雇う立場に立ったとき、そういう人たちと一緒に幸せになりたい、その子どもや親御さんも生活設計が立てられる仕事があつて、頑張ればよくなれる。自分ができることはそういうことなのかと思ったのです」

2011年初夏、トライアル雇用を始め、一人ぼっちではかわいそうだと2人を採用した。工場と一緒に働く若い女性から、「2人は集中力が持たない。すぐ疲れた、飽きたといいますが、そのたびに注意して励ましていますが、もうダメです」と、金成さんに相談がきた。

「もう少し頑張ってみようと話をしました。1人は『冷凍長』と呼んだら、仕



## 有限会社カナリシーフーズ

〒971-8101 福島県いわき市小名浜字吹松2-9  
TEL・FAX 0246-68-8080

事を任されることの喜びを感じたようです。もう1人は波がありますが、働いている間は、明るい未来に向けてほしいです」

「冷凍長」の湯沢優<sup>まさる</sup>さんは20歳。就職が決まっていた会社が被災したため採用取り消しになった。「冷凍長の仕事は寒いけれど、働けてよかったです」。給料はゲームなどに使い、友だちとデイズニ<sup>ひるた</sup>ーシーにも遊びに行くという。

蛭田<sup>ひるた</sup>大地さんは19歳。障害者施設で働いてから就職した。

「仕事ができれば何でもいいと思っていましたが、最初は慣れなかった。こういう仕事は初めてだったので、真空パックの詰め方、冷凍と大変でした。よかつ



冷凍魚の整理作業をする蛭田大地さん(手前)



「冷凍長」と呼ばれる湯沢優さん

たと思うことは、まわりの人たちとコミユニケーションがとれるときです」

金成さんは、「特別に配慮はしていない」と話す。「分け隔てなく。怒るときはめいっばい怒り、褒めるときはめいっばい褒めています」

### ● 卸から直売に。 震災前の売上げを超える

震災以降、フル稼働で干物の製造を行ってきたが、牛肉のセシウム問題が出るやうて守るか。金成さんは震災前から、県や市といわきのPRに全国を回っていた。そこで、ロシア産のウニを利用して郷土の名物「ウニの貝焼き」を販売することにした。

「行政は大丈夫だといっても、原発の影響がわからないし、自分が逆の立場に立ったら買うかなと思いましたが、よく売れました。日本は捨てたものではない。日本人は素晴らしい国民だと、勇気と感動をいただきました。感謝の一言です」

2011年11月、いわき市観光物産センター「いわき・ら・ら・ミュウ」のなかに直売店を開いた。責任者は弟で専務の金成俊明さん。予想以上に来客があり、店にはぎわっている。

現在、カナリシーフーズでは製造工場<sup>3</sup>で5人、店舗と合わせると23人が働いて

いる。同業の「山文<sup>やまぶん</sup>」の工場を共同で使い、山文の従業員とともに総勢20人で干物を作っている。

「何とか従業員の給料を払えます。以前は卸が主で、いまは直売が主です。売上げは震災前を超えました。加工の卸は

仕入れて、お金に変わるまで時間がかかりますが、いまはその日のうちにお金になります。小売は初心者でしたが、消費者の顔が直接見えるので手ごたえがわかります。何もなくなったところからはい上がろうというエネルギーは、私たちの世代が基盤にならないと盛り上がりづらいかと思えます」

社長の金成さんには、将来の夢がある。「利益を出して1円でも多く給料を払いたいのですが、その前に『1つの目標に向かって障害のある人たちと日々働ける時間を共有する』、そんな環境を作るのが私の仕事だと思っています。最終的な夢は、障害のある人たちをたくさん雇って、地元の港が復活したときには、生食対応できるくらいの製造工場を持つことです」

小名浜港には、海に出られない漁船が停泊していた。



金成俊明専務  
(いわき・ら・ら・ミュウの直売店で)





大洋会・鈴木将志事務局長（右）と佐藤直人所長

障害者就労支援の拠点として  
～就労継続支援B型事業の活用～  
社会福祉法人大洋会 岩手県

福祉避難所の役割を果たす

港近くに更地が広がり、そのなかに新たな工場が建ちつつある大船渡市。社会福祉法人「大洋会」は、1955（昭和30）年に設立された児童養護施設「大洋学園」をスタートに、生活介護施設、就労継続支援B型事業所4カ所、地域活動支援センターなどを運営し、2006年から岩手県立福祉の里センターの指定管理も受けている。利用者は300人を超える。

盛さか駅近くの就労支援の拠点、「気仙障がい者就業・生活支援センター」（以下、気仙センター）で話を聞いた。法人の施設はほとんどが大船渡市の高台にあるが、ここは近くまで津波がきてギリギリ助かったそうだ。

3月11日、多くの利用者は各施設にいた。家庭を回って花を販売していた就労継続支援B型事業所「慈愛福祉学園」の6〜7人が陸前高田市の岬で孤立。無事がわかったのは翌日になってからだ。家族を亡くしたり、家を

流された人はいるが、職員や利用者は全員無事だった。大洋会事務局長の鈴木将志さんは情報が遮断され、しばらく状況がつかめなかったという。

「大洋会は、幸いなことに丘陵地帯に施設がありました。通所の利用者は家に帰れる状態ではなかったため、福祉の里センターに避難しました。2〜3日して陸前高田市の津波の映像を見て、地元も本当に大変だったことがわかりました」

陸前高田市にある施設「青松館」が床上浸水した。また陸前高田駅近くの気仙センターのサテライトオフィスは、地震が起きたときは就労支援の相談が終了した後だった。相談員の鈴木市子さんは陸前高田の自宅に帰り、所長の佐藤直人さんと地域活動支援センター指導員の新沼富士夫さんは車で三陸道を走り、大船渡に戻ってきた。その後、建物は流された。

法人の施設や福祉の里センターは、7月ぐらゐまで福祉避難所の役割を担った。気仙センターと児童家庭支援センターの相談員は近くの避難所を回り、利用者だけでなく、精神的なダメージを受けている人たちのケアを行った。大きなパニックを起こした人は幸いいなかった。佐藤さんは、「普段からの信頼関係があったので対応できた」と振り返る。「早い時期から各県からの支援があり、助かりました。利用者は精神障害の方たちが多いので、普段の様子から厳しいかと思

ったのですが、みなさんちゃんと逃げて避難所にいたのが救いでした」

国内外からたくさんの方々が届いた。流失した大船渡駅近くのグループホームは、支援を受けて新たな場所に再建中だ。障害者施設の職員たちの人的支援にも助けられた。

通勤、住まいが雇用の課題

4月半ばから、就労継続支援B型事業所は活動を再開した。市の建物の清掃などの施設外就労はできなくなったが、復旧関係の助成金で、震災で事業を止めたパン工房や椿油の製油事業を引き継いだ。

気仙センターは、大船渡市・陸前高田市・住田町が担当エリアだ。被災企業は、従業員を一旦解雇。障害者も16人が解雇された。半数は会社そのものがなくなっってしまった。佐藤さんら担当者はその対応に追われた。

「解雇された人たちはB型の利用につなげて、会社の再建を待って



震災時の体験を話してくれた鈴木市子さんと新沼富士夫指導員（右）



## 社会福祉法人大洋会

〒022-0006 岩手県大船渡市立根町字下欠125-15  
TEL 0192-26-2714 FAX 0192-26-2771



被災者の世話に活躍した  
星雲工房の榎山博己作業指導員

きれば再就職を、また前の会社にこだわらず就職もさせています。会社が再建して一般求人募集をしても応募がない状況がありました。そこで、障害者を雇用していただけないかと働きかけて、新たに障害者を採用した企業もあります」

相談件数は増え、2010年度は14件だった新規雇用が、震災後の緊急雇用対策もあり、知的障害者26人が就職できた。業種はパチンコ店、水産加工会社、土木会社のガレキ撤去の手事的な部分などだ。

「即戦力なら採用していただけますが、余裕がないので実習はごめんなさいという企業がほとんどです。支援は知的障害者が圧倒的に多いので、雇用してくれそうな企業に就労支援ワーカーが出かけて、職種、仕事内容などを聞き、マッチングする障害者を探し、またトライアル雇用でジョブコーチが支援に入り、雇用につなげる形をとっています」

現実には、マッチングが難しいようだ。「仕事の話があっても、働ける人がい

ないケースもあります。バスは走っていても通勤が難しい。昔から交通の便は悪かったのですが、さらに悪くなっています。まだグループホームが作れる状況ではなく、住居がこれからの課題です」

### ● 日ごろのネットワークが支えに

大洋会の職員は200人を超え、障害者も4人働いている。「利用者に職員であることを納得してもらえない人ではないと難しい」と佐藤さん。

相談員の鈴木市子さんは足が不自由だが、勤務して3年目になる。陸前高田市の自宅が津波に流され、仮設住宅から通っている。

「隣の奥さんに『車に乗って!』といわれ、一緒に逃げて助かりました。『生きろ』ということだと思えます。一番大変だったのは避難所生活で、人の嫌な面も感じました。所長の支えもあり、震災の経験を生かしながら、障害者の立場になって相談にのれたらと思っています」

新沼富士夫さんは下肢に障害があるが、地域活動支援センター指導員として送迎やレクリエーションを担当している。「送迎は安全第一、ポッチャ(\*)などのニュースポーツは楽しくやっています」

榎山博己さんは、40人近くが通う「星

雲工房」の作業指導員。精神障害があるが、勤続4年になる。保育所、老人ホームなどに菓子を運んだり、菓子箱を折ったり、利用者の送迎を行っている。地震当日は、箱を詰めたダンボールが倒れてきた。福祉の里センターで、家を流された障害者たちの世話もした。「すごい地震だと思いましたが、パニックにはなりませんでした。仕事はだんだん増えてきていると思います」

法人としての今後について鈴木さんは、「個人的には、継続が大事だと考えています。復興の途中ですが、法人全体としてこれまでやってきたものを基盤として、障害のある方たちが次のステップに進んでいくお手伝いができたらと思っています」

佐藤さんは、「相談業務をしていると、企業や全国の施設などつながっていてよかったです。本人確認では、事業所に聞けばわかりましたし、情報の共有や連携が取れました。いざ何かあったときには常日ごろのネットワークが重要だと思っています」

陸前高田市は、市街地だった全域が荒野と化している。現地を通ると、駅は海からかなり離れていて、「ここまで津波がくるとは思わなかった」という話が実感できた。地域活動支援センターのサテライトの再開はこれから。陸前高田市の利用者は、送迎で対応している。

(\*) ポッチャ=ボールを転がし的に球に近づける、ローン・ボウリングに似たスポーツで、運動能力に障害のある人向けに考案された。パラリンピックの公式競技で、世界40カ国に普及している





特別養護老人ホーム・木村利彦施設長（右）と齋藤俊介課長

震災に負けず、働き続ける  
～介護職員補助として知的障害者を雇用～

特別養護老人ホームおながわ 宮城県

●●特別養護老人ホームでの障害者雇用

宮城県の東、太平洋に望む牡鹿郡女川町。津波がきた海岸一帯は更地に仮設の事務所が建ち始め、重機が動いている。「社会福祉法人永楽会」は1980年に設立され、宮城県内で特別養護老人ホーム、高齢者のデイサービス、知的障害者の支援施設、グループホームなどを運営する。職員数500人ほどの大規模な法人だ。

「特別養護老人ホームおながわ」は2006年5月に開所した。入所者50人（シヨトステイ10人含む）、デイサービス20人を受け入れ、認知症の人のグループホーム、居宅介護支援も行っている。全室が個室。木をふんだんに使った居心地のいい空間で、高齢者が10人ずつユニットごとに生活している。ユニット間には野菜が育ち、季節の花々が咲く。そこに「普通の暮らし」を感じる。

職員は約80人。開所時から7人の知的障害者（男性4人、女性3人で30～40代が中心）が介護職員補助として働いている（同法人のほかの2施設でも、知的障害者を1人ずつ雇用）。

震災前までは、ここで働く知的障害者の親たちが館内で喫茶店を運営していた。施設長の木村利彦さんは、開所時は女川町の健康福祉課長だった。2008年3月に退職後、2009年8月からお客様相談室長として勤務し、2011年6月に4代目の施設長になった。「法人として、将来は女川の人たちに任せたいという思いがあったと聞いています。地域に開かれたホームを目指しています」

知的障害者は、ここで働くまでは町の授産所でゴミ袋などを作っていた。「町の意向もありましたし、法人としても開設のときから障害のある人たちも一緒に働くという理念がありました。すでに障害者の雇用経験もあったのでノウハウを生かしました。最初はジョブコーチが視覚的にわかりやすい予定表を作り、職員とともに数カ月指導しました」

主な仕事は居室の掃除、ベッドメイキング、リハビリやユニットごとの食事の手伝いなど。9時から15時のシフト勤務で週休2日制。歓迎会、忘年会など、職員の親睦会は一緒に楽しんでいる。

「現場の理解が大切だと考え、各部署や看護系の職員7人で障害者就労支援委員会をつくっています。1～2カ月に1回、いろいろな問題を話し合ってきたので、今日まで雇用が続いてきたのだと思います。障害のある人たちの目線に立つて接するのが大切だと思います」

●●震災のシヨックは支援でカバー

震災では建物の地下に水が入り、一部の壁が落ちた。盛り土のため、地盤も沈下した。電気、水道、電話も止まった。食事関係は民間業者に委託していたが、備蓄食糧を利用者と職員に提供した。本部や各地から支援物資が届いたものの、1日2食が約1カ月続いた。水は近くの水産加工会社が提供してくれた。

知的障害者たちは、町の仮設福祉住宅に2人、ケアホームに2人、避難所から仮設住宅に移って3人が暮らしている。施設長の木村さんも仮設住宅から通う。

「震災後は住むところもなく混沌としていました。とにかく夢中でした。ボランティアの人たちがきてくださった時点で、職員に休んでもらいました」

介護課長の齋藤俊さんは東松島市在住。2011年7月まで避難所生活を送った後、仮設住宅に移った。震災当時は内陸の施設にいたが、2011年6月に赴任してきた。

「職場がなくなると、誰でも精神的に



利用者の部屋を回り、ゴミ処理作業をする阿部伸明さん



## 社会福祉法人永楽会 特別養護老人ホームおながわ

〒986-2231 宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜字小屋ノロ1-1  
TEL 0225-53-5181 FAX 0225-53-5185

## 株式会社アップルファーム

〒984-0031 宮城県仙台市若林区六丁目字南97-3 e-環境仙台ビル  
TEL 022-390-1101 FAX 022-390-1102

## 新たな職場に進出

六丁目農園 宮城県



「六丁目農園」を  
経営するアップルファームの  
仙台で渡部哲也社長

「編集委員が行く」(2012年9月号)で取材した「六丁目農園」は、新規に仙台市北部にある「ベストウエスタンホテル仙台」のビュッフェスタイルのレストランと宴会の業務を請け負った。さらにホテルのベッドメイキング、館内の掃除、隣接のゴルフ場の管理も委託することになっている。

六丁目農園を経営するアップルファームの渡部哲也社長

落ち込むと思いますが、障害のある方は我々よりもシヨックが大きいと思います。ケアホームが流されて、ここで仕事をしてここで泊まるのではストレスがたまりません。疲れてきて、食べ物で気持ちまをまぎらわせて、体重が増えた人もいました。日ごろから研修をしていたことと、石巻障害者就業・生活支援センターのジョブコーチなどの支援で、震災後もみんなが頑張ろうという思いになれたのだと思います」

津波の大変な経験に負けずに頑張っている、2人の知的障害者の話を聞いた。

阿部伸明さん(31歳)は、仕事の流れを書いたノートを見ながら、毎日の仕事をします。茶碗洗い、掃除機をかける、ふき掃除、モップかけ、手すりふき、昼食の

準備などだ。「得意なのはシート交換。端と端をきちんとするのが難しいですが、寝心地がいいといわれる。おばあちゃんからは、孫みたいな感じといわれています」

当日もここで働いていた。津波で両親が亡くなった。「お母さんとお父さんが……。思い出すと泣いてしまう」。サッカーが大好きで、ポジションはゴールキーパー。「チームはそんなに強くない。いっぱい練習して、2013年の全国障害者スポーツ大会に出るのが目標」

笑顔がとても素敵な木村睦子さん(44歳)は、午前中はホットパックを作ったり、利用者の患部を温めたり、足に重りをつけたり、リハビリの手伝いをする。取材時はデイサービス利用者の手伝いでおやつ

を用意し、一緒にゲームをしていた。「リハビリの手伝いがいいです。気持ちいい、ありがたいと喜ばれるとうれしいです」

地震のときは生涯教育センターの4階に支援員と避難したが、津波に流されそうになった。母と妹を亡くし福祉住宅で暮らす。津波で流された女性専用のケアホームがまもなくオープンするのが待ち遠しい。「仕事が休みでケアホームにいました。腰の上まで水がきて流されましたが助けられました。早くケアホームの広い部屋に入りたい。料理は得意です」

女川高等学校が来年3月に閉校になり跡地に新校舎を建設、2016年4月に高等特別支援学校が開校する。施設長の木村さんは、明るい話題に期待を寄せる。

「卒業生はうちでも採用していきたいです。水産加工場で働くとか、女川で就職の場を提供できればいいですね。特別支援学校を受け入れるので、これからは町全体で障害者との接し方を考えていきたいです」

営する株式会社アップルファームの社長、渡部哲也さんは震災後、改めて働く意義を感じたという。「人のために動くことが働くことです。『依存から自立』をキーワードに、ホテルリゾートのなかで社会と触れ合って当たり前に働く。そこがショールームのようになって、一般企業や福祉作業所が変わっていくきっかけになればと思います。『福祉はかっこよく』がテーマです」

障害者の職場作りが被災者にまで広がった「TOHOKU ROKU PROJECT」は、被災地の建築ラッシュで着工が遅れ、5、6月に完成予定だそうです。



利用者たちと話す木村睦子さん





宮城障害者職業センター

被災地の職業センターとして  
宮城障害者職業センター 宮城県

いち早く就労支援を再開。  
解雇を防ぐ

多くの被災地を担当する宮城障害者職業センターは、仙台市宮城野区にある。当日、事務所は激しく揺れた。ボイラーの配管が外れ、水道も配管が割れて漏水、建物本体も沈み込んだ。

相談室と職業準備支援室には15人ほどの利用者がいた。精神障害者の相談を受けていた障害者職業カウンセラーの三谷幸代さんは、「ロッカーが倒れてきて、まず利用者を守らなければと思いました」

評価アシスタントの鈴木由美さんと齋藤淳子さんは、職業準備支援室で支援を行っていた。「動けなくて固まっている人も、声をあげたり、泣き出した人もいました。『大丈夫だよ』と一人ひとりの目を見ながら話しかけました」

利用者も早く家族に送り届けなければ。職員たちは信号が止まり、地割れや陥没、電線が垂れ下がる道路を走った。予想を超えて津波は近くまで来たが、幸い海辺の家の人はいなかった。古川まで出かけていた職員は、通常1時間の道を5〜6時間かけて戻ってきた。



宮崎哲治所長

思い切って前へ

2週間後には、公用車2台をガソリン優先供給車両に指定してもらい、3月最終週には支援の範囲を遠隔地まで広げた。4月初めに高速道路が開通。宮崎さんは被災の厳しい石巻、気仙沼を訪れた。「まだあちこち水も引いていませんでしたし、店のなかもぐちゃぐちゃで建物も倒れたまま、言葉が出ないありさまでした」

4月7日、宮城障害者職業センター周辺は、3月11日より被害が大きい余震に見舞われた。1カ月を過ぎたころ、2008〜2010（平成20〜22）年のセンター利用者447人全員の安否確認ができた。ケガをした人はいたが、亡くなった人はいなかった。

陣頭指揮をとった所長の宮崎さんは、「自分の判断でどんどん動いてほしい」と職員に告げた。「みんなパワフルでした。どこの機関よりも早く動いていたと思います。大変だ、きついなと思うか、自分でやるべきだと思うことを思い切ってやるか、その違いは大きいと思います。前向きに考えて取り組もうと話しました」

「所長のパワフルさに引きずられて、みんな頑張っていました」と三谷さん。「暗くなかったですね。震災の日、利用



## 宮城障害者職業センター

〒983-0836 宮城県仙台市宮城野区幸町4-6-1  
TEL 022-257-5601 FAX 022-257-5675



仙台駅近くに開設された職業準備支援室で、被災地を担当する職員のみなさん

### ● 震災対策の 職業準備支援は好評

2011年7月、職業準備支援室・青葉通りセンターが仙台駅前の青葉通りプラザビル14階にオープンした。支援拠点

災地域では、障害者就業・生活支援センターを運営する社会福祉法人が障害者の避難所になっていたため、石巻に週1回、気仙沼には2週間に1回のペースで半年間、カウンセラー、ジョブコーチが出勤して支援を続けた。被災企業からは「会社に来てもらっても、面倒を見ることのできないので復旧するまで預かってほしい」という相談も多かったそうだ。

者を送っていくときも、怖いという気持ちではなかったです」と齋藤さん。  
迅速な行動が、障害者の解雇を避けることにつながった。ジョブコーチは利用者が避難所にいると聞けば様子を見にいった、心のケアを心がけた。約1カ月半、さまざまな出来事の連続だった。  
4月に入っても被

が2カ所に加え、企業に戻るまでの支援、解雇された人の再就職のための支援がより多くの人たちに提供できるようになった。

宮崎さんは、「知的、発達、精神障害の方に對しては、生活のリズムを崩さず、労働習慣を再構築できるように、会社が再開したらすぐ戻れるように、職業準備支援を受けてもらいました。ただゴールがわからないので、臨機応変なプログラムにしています。会社には仮の出社場所として安心してもらえたので、有効に機能したと思います」

鈴木さんは、「仙台の駅前なら通える」と利用者が増えました。企業の見学も増えています。齋藤さんは、「大変なときほど知恵が出る気がする」という。「利用者が1日20人に増えたので、全員に目配りをしながら支援するのは大変でした。利用者同士もいろいろありました。職場により近い雰囲気での対応ができたと思います」

震災対策事業として仙台駅前に職業準備支援室・青葉通りセンターが開設されると、全県からの利用者が増え、2011年度は年間1000人を超えた。

現在、石巻、気仙沼の一部地域を除き、ほぼ通常業務に戻ったと宮崎さんは話す。

「最近では、県内の障害者就業支援・生活支援センターの業務は平準化していま

す。ただ、義援金が出て、買い物依存やギャンブル依存の相談があると聞きます。家を建て替える、土地を買い取るほどの金額ではないので、車や衣服に使ったり、毎日外食したりしてしまふ。難しい問題です」

震災当時の利用者たちは、震災後の支援により、復職・就職している。障害者の求人倍率も上がっている。ただ、2012年9月の障害者合同面接会の仙台地域の求人数は261件、そのうちの38件、石巻地域も59件のうち10件が、サービスの警備業務。つまり工事現場のガードマンなどの震災復興の一時的な求人だ。その求人を見ながら、宮崎さんは、「障害のある人にはマッチングしにくい」と感じている。

「求人倍率が高いのですが、交通誘導、ガレキの撤去、建設の補助など、一般人で採用ができない企業の求人が多いです。一見、景気はいいようにみえるし、4月に障害者雇用率も上がりますから、求人はたくさん出てくると思います。魅力ある求人や障害者にふさわしい求人は増えていないという感じがします」

大災害が起きたとき、障害者雇用がどのような状況になるのか、どう対応したのか。宮城障害者職業センターでは震災時のエピソード、企業からの意見などの資料をきちんとまとめています。